

本書の書評をいただいて 著者 杉原誠四郎

平成27年(2015年)に日本で出版した共著『日本人の原爆投下論はこのままでいいのか—原爆投下をめぐる日米の初めての対話』(日新報道)を受けて、2019年になって英訳されて発行となった Harry Wray 氏と私、杉原の共著 **Bridging the Atomic Divide: Debating Japan-US Attitude on Hiroshima and Nagasaki** (Lexington Books) について、Tadashi Hama 氏から書評していただいた。このことは、まことに光栄であり、厚く感謝申し上げたい。

さて、そこで、この書評を読んだ上で、以下3点について述べておきたい。

(1) Hama 氏の書評はアメリカに向けてまことに厳しい言及の書評であるが、第2次世界大戦前には白人には顕著に人種偏見があり、世界で歴然と人種差別があったことは確かである。これを現時点で述べる場合に、過去の事実として淡々と指摘するか、今なお強く怨恨を込めて指摘するかの区別がある。歴史の記述として、年月が流れるとともに前者の傾向が強くなるであろうが、後者の立場で述べてもそれ自体が間違っているわけではない。

ともかく後で述べるジョン・ダワーが言っているように、日米戦争は明らかに人種戦争の側面を持っていた。

しかし原爆投下をめぐるのは人種戦争である以上に、アメリカのルーズベルト大統領の戦争指導それ自体に大きな問題があることを指摘せざるをえない。日米戦争は、実際はルーズベルトが日本に戦争を仕かけるように誘導して始まった戦争であり、アメリカが欲し、日本が欲しなかった戦争である。そのルーズベルトが、この戦争をして、原爆を投下しなければ終わらないまでに拡大したのである。

そのことを十分に認識していない Wray 氏に向けては、私、杉原はこの本で、この点を十分に指摘したつもりである。

ルーズベルトの戦争拡大の戦争指導がいかに悪質であり、誤った戦争指導であったか。

ヨーロッパ戦線でも、ソ連はヒトラーの率いるドイツとともに、ポーランド侵攻を始め、その意味で第2次世界大戦を始めた、明らかに侵略戦争開始国であった。だから独ソ戦でソ連を助けるとしても、ドイツ兵をソ連領土から追い出した時点で、戦争終結に導くべきであった。対日戦で言えば、昭和19年(1944年)7月、日本から見たところのサイパン陥落の時点で、日本は抵抗する手段を失い日米戦争は確実に勝敗が決したのであるから、この時点で終戦を図るべきであった。日本側から見ると、この本でも指摘しているように、日米戦争の犠牲者の80パーセントはこの後の終戦までの約1年間で出たものなのだ。アメリカ兵の犠牲者も事実上ほぼ同じことが言えるだろう。

このルーズベルトの誤った戦争指導が原因して、アメリカは日米戦争終結後、朝鮮戦争で約4万人、ベトナム戦争で約5万人のアメリカ兵が犠牲となった。

このルーズベルトの過ちに対する自覚が少ないのは、Wray 氏もそうであり、また、一般

的にいって、アメリカ国民にもその自覚が乏しいのは遺憾である。そのため、この本で私は厳しくその点を問い詰めている。原爆投下をめぐるのは、より大きな責任を負うべきは、トルーマン大統領ではなくてルーズベルト大統領であると、本書で私は述べている。

ところで、Wray氏は、アメリカ軍は世界歴史上かつてなかったような寛大で民主的な占領をしたと述べているが、それはアメリカ人のそれまで持っていた日本、及び日本人に対する敵意と比較してのことであり、また、ソ連軍による占領と比較してのことであって、それはそれで間違っていないと言うべきであろう。ただ、Wray氏の言う、民主主義化の問題であるけれども、これは後で述べる勝岡寛次氏の本に出ているが、日本は戦前の立憲君主制ですでに民主主義を実現していたともいえ、少なくとも日本人はアメリカの民主主義を受け入れる素地をすでに持っていたということがいえ、占領軍の民主主義化の政策はもともと成功しやすかったのだということを、Wray氏は必ずしも十分に自覚していると言えない。Wray氏は気づいていないけれども、日本が受諾して戦争が終わったポツダム宣言の第10項目には「日本国政府ハ日本国国民ノ間ニ於ケル民主主義的傾向ノ復活強化ニ対スル一切ノ障礙ヲ除去スベシ」という文言がある。この文言は今述べたこのことを指している。

しかしながら、Wray氏の日本語版の書名のように、日本人の原爆投下論はこのままでいいのかという問題提起には十分に当たっているところがあり、日本人の私、杉原としては受け入れなければならないところがあると思っている。Wray氏が言うように、原爆投下の中心目的は明らかに戦争の早期終結のためのものであったのにもかかわらず、日本の教科書や広島原爆資料館（広島平和記念資料館）では、投下の必要はすでになかったのに、戦争終結後の国際関係で優位に立とうとして落とすように説明している。これはアメリカ人としては納得できないというのは、私は日本人として受け入れなければならないと思っている。

以上のような意味で、この本は、原爆を投下した側のアメリカ人と、投下された側の日本人との初めての健全で力強い対話になっていると言えよう。本書の裏表紙に、武蔵野大学教授貝塚茂樹氏が次のように述べているが、まさにその意味で、本書は原爆投下をめぐるアメリカ人と日本人の初めての対話として成功していると思う。

《解釈は生きるために行う人間の行為だから、立場によって解釈は変わる。だから史実は1つであるとしても、その解釈は立場によって異なる。原爆投下をめぐる解釈も、投下された側と投下した側とで異なるのは当然だ。だが、史実を間違えて認識し、そこから間違った解釈をし、その間違った解釈に固執するのは、国家的な道徳の退廃だ。本書は原爆投下をめぐる日本の学者とアメリカの学者とが互いに立場の違いを認め合いながら、間違った解釈を排除するために行った日米の初めての対話だ。そこに原爆投下をめぐる真の日米和解がある。》

(2) Hama氏の書評に関し、内容の上では関係ないが、日本語版が先にできて、それを引き継いで英語版ができ、そのことを前提に書評をいただいたのであるが、ここで平成27年

(2015年)に出た日本語版と、平成31年(2019年)に出た英語版との間の内容の異動について述べておきたい。

英語版には、付録として次の3つのものを収録している。

Appendix A として、「日米の開戦外交と終戦外交とその後の問題」

Appendix B として、「ハリー・レイの真珠湾問題に関する論考について」

Appendix C として、「オバマ大統領広島訪問の歴史的意義について」

このうち、**Appendix A** は、日本語版で「解題付録」として記述したものと同一であり、その点で日本語版と英語版との間に違いはない。しかし、**Appendix B** と、**Appendix C** とは英語版にのみ掲載し、日本語版には欠如している。

Appendix B については、以下のような意図の下に掲載していることを述べておきたい。原爆投下に終わった日米戦争は、原爆投下を問題にするゆえに、その考察において、この戦争はどのようにして始まった戦争なのか、そしてどのようにして終わった戦争なのか、そのことについて、必然に関心を寄せざるをえない。**Wray** 氏と私とは、いささかも申し合わせたことはないが、奇しくもともに日本海軍の真珠湾攻撃の問題を考察していた。私にも真珠湾問題に関する論考は多いが、**Wray** 氏も、真珠湾問題について論文を書いていた。論文はかなり前に書いたもので、その後の真珠湾問題の研究状況が必ずしも十分に反映していないが、原爆投下をめぐる真珠湾問題として、共著としての英語版を世に発表するに当たり、**Wray** 氏の真珠湾問題を論じた論文を取り上げ、それに私の解題を施したわけである。

Appendix C については次のとおりである。英語版に先行した日本語版『日本人の原爆投下論はこのままでよいのかー原爆投下をめぐる日米の初めての対話』は、平成27年(2015年)12月8日(日本暦で真珠湾攻撃の日)に出版したのであるが、その約半年後、平成28年(2016年)5月27日、アメリカのオバマ大統領が、アメリカの大統領として初めて、原爆投下の地、広島を訪問し、原爆犠牲者の碑に花環を奉げ、犠牲者の霊を慰めた。原爆投下より71年目にして歴史に刻印すべき出来事であり、私、杉原は、その歴史的意義について私なりに論じたのである。そして**Wray** 氏の、日本人の原爆投下論を批判したこの本の英訳版を出すに当たって、その中に収録しなければならないと思い、**Appendix C** として収録したわけである。

なお、**Appendix B** は、その日本語版が、明星大学戦後教育史研究センター『戦後教育史研究』第32号(2019年3月刊行予定)に載ることになっている。**Appendix C** は、その日本語版も英語版も「史実を世界に発信する会」からすでに公開されている。

(3) 本書は、原爆を投下した側のアメリカ人の **Wray** 氏と、原爆を投下された側の日本人の私、杉原が、原爆投下をめぐる是々非々を論じ合ったものであるが、この「史実を世界に発信する会」より **Hama** 氏より書評していただき紹介してもらうに当たり、英語圏でこの英語版を読む人に一言さらに追加しておきたいことがある。

英語版の最後に私が書いた「英語版のためのあとがき」でも少しばかり触れているのであ

るが、ジョン・ダワーというアメリカの有名な歴史家が、昭和20年（1945年）9月27日の第1回目の昭和天皇とマッカーサーの会見について、昭和天皇は命乞いのためにマッカーサーに会いに来たと述べている。

これほど誤った、天皇制、天皇への理解はない。確かに昭和天皇は降伏に当って、天皇制の維持にこだわった。しかしそれは自己の延命のためでは全くない。天皇とは人民の幸せを祈るために存在するものであり、それを前提として天皇制があるのである。

私は「英語版のためのあとがき」で、次のように述べた。

《昭和天皇は、明治、大正の栄光の時代を背負って、立憲君主国の君主として、忠実にこの憲法に従っていたのだ。第8章の「解題」で述べたように、終戦間際の昭和天皇は天皇制の崩壊をどれほど恐れていたことか。神武天皇以来、124代目の天皇として、自分の代に天皇制を崩壊させることはできない。しかしそれでも、ソ連が侵入してきたり、アメリカの占領軍の占領政策次第で天皇制が廃止となることになったとき、その際に天皇の最後に残る使命は何か。第4章の「解題」で少し触れたが、それは国民を1人でも多く生き残るようにすることであつたらう。国民を大切にすることが、歴史的に続く天皇の究極の使命であり、またそれゆえに国民は天皇を信頼するのである。》

この引用文に一言追加したいと私は言っているのであるが、もし敗戦の仕方で、本当に天皇制が崩壊することになったとしたら、天皇としてなさなければならない最後の仕事とは何であろうか。それは言うまでもなく1人でも多くの日本国民を救うことである。その際、天皇制打倒を叫んでいる共産党の人であろうと、それが日本国民である限り、分け隔てなく救おうとするであろう。日本の歴史的にできてきた天皇制及び天皇というのはそういうものなのである。

本書を「史実を世界に発信する会」で紹介していただけるに際して、このことを、英語圏の人のために一言追加して述べておきたかったのである。昨年、勝岡寛次氏が『天皇と国民の絆－占領下の苦難を越えて』（明成社）を出した。英語圏で、昭和天皇に見る天皇制を認識するのに適切な本である。